

詩「春に」(解説)

覚えておいてほしいところや
+αを解説します！



○詩の形式

☆「口語」「文語」について

詩の「形式」と言われたら、口語自由詩などの4パターンについて聞かれているのだとすぐに気がつけるようにしましょう。

口語、文語を見分ける「話し言葉」と「書き言葉」の区別ですが、ざっくりとした言い方をすると、「話し言葉」は「現代の言葉」であり、「書き言葉」は「昔の言葉」だと思ってください。

例文で比較しましょう



【口語】
宿題が早く終わった。とてもうれしいことだ。

【文語】
宿題疾く終わりにけり。いと喜ばしからん。

というように、まるで古語のような(実際古語なんですけども)文章が「文語」にあたります。このような古語は戦後には使われなくなりましたが、昭和初期までは当たり前のように使われていました。むしろ、明治時代までは口語体の文章はほとんど使われていなかったのです。私たちには信じられない話ですが、その頃は会話で使う言葉と文字におこす言葉とは明確に分かれてゐたのです。

「けり」や「なり」、または「候(そうろう)」などが使われていた場合は文語、ですます調などの普通の言葉だった場合は口語だと思ってください。みなさんが目にする詩はだいたい口語詩ですね。

3年の教科書に出ている『高瀬舟』の筆者である森鷗外さんが書いた『舞姫』などは文語体で書かれているので読んでみると面白いですよ。

☆「定型詩」「自由詩」について

定型詩と自由詩の話をする前に、「七五調」の話をしなければなりません。「七五調」とは、その名のとおり五・七・五のリズムのことです。五七五といえば「俳句」や「短歌」ですよ。

【七五調】
宿題が 早く終わって うれしいな

【七五調じゃない】
宿題が早く終わったからうれしい

七五調の文章は読んだときに独特なリズムが生まれます。読みながら手拍子を打てるような文章は定型詩ですね。

一方で、七五調ではなくリズムにとらわれずに書かれた詩を自由詩といいます。

【定型詩】
宿題が早く終わってうれしいな
きっとこれならほめられる
家族みんなでいい気分

【自由詩】
宿題が早く終わったからうれしい
きっと僕はほめられるだろう
お父さんもお母さんも妹もペットの犬だって
うれしくてたまらないみたい

【文語自由詩】
宿題疾く終わりにけり
いと喜ばしからん
正しく賞賛に値する我が行いに
一族郎党満面の気色を浮かべなん

比べてみるとちがいが
わかりますね！



また、余談ですが「散文詩」というものがあります。散文詩は自由詩のように一文ごとに行を変えず、句読点を用いる詩のことです。

【散文詩】
宿題が早く終わったからうれしい。きっと僕はほめられるだろう。

書き手が詩だと言ったら詩なんです。

○詩のまとまり

詩のまとまりといえば「連」ですが……



詩のまとまり、他の文章で言うところの「段落」は「連」と呼ばれることは既に学習してありますね。しかし、『春に』では連の区切りがなく、ひとつのまとまりに見える形となっています。ということは、この詩では丸きりひとつのことを述べているのでしょうか。

この問題については、**情景を浮かべながらじっくり読み込んでみる**ことで解決できます。結論から言ってしまうと、解答にあるとおり、「この気もちはなんだろう」という言葉を区切りに、3つのまとまりに分けられます。

第一のまとまりでは、春を迎えた大地から自分自身へ伝わってくるエネルギーの様子を。

第二のまとまりでは、相反し複雑に絡み合う自分自身の感情を。

第三のまとまりでは、感情に動かされるままに活動したい**具体的な行動**を。

じっくり読み込むことで、まとまりごとに異なる情景が表現されていることに気がつくことができます。その言葉で何を表されているのか、何が起きているのか、行われているのか、一つ一つの言葉を噛みしめるように読み込んでいきましょう。

【詩は味わうもの】

『春に』の作者である谷川俊太郎さんは、「詩は理解するものと言うより、味わうもの」と語っています。言葉を解析し、形式的に理解しようとする、本来の意図から遠ざかってしまう。そこで、作者の気持ちに共感し、作者はどういう思いでこの詩を書いたのか、その心の状態に気づいていくことが大切です。豊かな発想を、「ちそうのように味わってみましょう。」

「あるあるー」「わかるー」と共感できる部分をみつけてみてね



○対句

対句はもう慣れっこですね。同じ形の文をいくつも使うことで、それぞれの共通点や相違点を分かりやすく表現します。

行番号⑧⑨⑩はみんな「○○だ」という同じ形で始まりますね



では、もし対句の文が一つだけならどうなるでしょう。

よろこびだ しかしかなしみでもある

これだけでも何か哲学的な深い文に見えますが・・・「？」という感じが大きいですね。

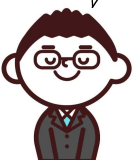
よろこびだ しかしかなしみでもある
いらだちだ しかもやすらぎがある

二つ並べて対句の形にしました。これではどうでしょうか。一行だけのときよりも、上の言葉と下の言葉が対比されている様子が見やすくなってきましたか？そして二つ並べてみます。

よろこびだ しかしかなしみでもある
いらだちだ しかもやすらぎがある
あこがれだ そしていかりがかくれている

三つも並べられると、「ああ、反対の気持ちがあるんだな」とはつきり気がつくことができます。このように、対句は同じ形で並べることができ、相違点をはつきり読み手に感じさせることができます。

⑳㉑と㉒㉓でも同じ効果が見られます
確かめてみましょう



対句は二つ以上のものを比べたり、並べることで意味を強めたりするときにとっても効果的です。ことわざなどでも「月に叢雲、花に風」や「帯に短し、たすきに長し」などたくさん対句が使われています。アーティストの歌詞なども、気をつけて見るとけっこうありますね！

○反復

反復法とは、文中に同じ言葉を繰り返す技法です。対句法と似ているようにも思えますが、対句法は形が似ているだけで細かなところは違う言葉を使う一方で、**反復法は全く同じ言葉を繰り返す技法**、という違いがあります。

【対句法】

ケーキが食べたい。ドーナツも食べたい。

【反復法】

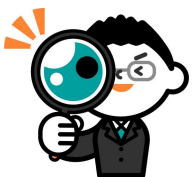
ケーキが食べたい。ケーキが食べたい。

この例を見ると分かるように、対句法に比べて反復法はその言葉を強調するという面が非常に大きいです。気持ちだったり情景だったりを読み手に強烈に印象づけます。

反復法を使うと

強く印象に残るため

芸人さんもよく使いますね



ここで、反復法が最大限に生かされている、山村暮鳥さんという方の詩をひとつ紹介します。

いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
いちめんのなのはな
かすかなるむぎぶえ
いちめんのなのはな

わっ、と広がる菜の花畑の様子が目には浮かぶようですね。この詩にはまだ続きがあるので、気になる人は「山村暮鳥 風景」で調べてみてください。

『春に』では「この気もちはなんだろう」という言葉が反復されています。反復されているということは強調されているということ。この詩を読み味わうときに大切なことは、「この気もちはなんだろう」という言葉に込められている作者の気持ち・意図を考えることですね。

○比喩(ひゆ)

比喩とは、そのものの様子や状態を、たとえ言葉で読み手に想像させる技法です。比喩を使うことで、様子をより詳しく読み手に伝えることができます。

【例文】

母の作るクッキーが固い。

この例文を使って考えてみましょう。この文だけではクッキーが固いといっても、どのくらい固いのかは読み手に伝わりにくいです。そこで、比喩の要素を足してみましょう。

【比喩①】

母の作るクッキーが石のように固い。

「石のように」というたとえ言葉を加えました。これならば、誰が読んだとしてもクッキーの固さがしっかり伝わります。では、次の文はどうでしょう。

【比喩②】

母の作るクッキーはまるでダイヤモンドだ。

「固い」という言葉をなくしてみました。それでも例えてある「ダイヤモンド」が固いものだど皆知っているので、「クッキー＝固い」が伝わります。石なら頑張って噛めそうですが、ダイヤモンドは無理かもしれませんね。

右の比喩①や比喩②など、「まるで」「ように」を使う比喩を直喩といいます。一方で、それらの言葉を使わず、言い切ってしまう比喩を隠喩といいます。

【隠喩】

母の作るクッキーは鋼鉄製だ。

隠喩は直喩よりも強い印象を読み手に与えますが、前後の文脈を意識しないと「え？本当に鉄でできるの？」などと読み手を混乱させてしまう場合があります。自分で使う際は注意しましょう。

隠喩は諸刃の剣です



○擬人法

擬人法は比喩の仲間です。たとえ言葉を用いるのは同じですが、擬人法は人間以外のものを人間にたとえる技法です。人間にたとえるからといって、「猫は人間だ」なんて使い方はしません。主に動作や様子を表すことで人間のように表現します。

【例】

猫がおどる。

草がおしやべりしている。

学校は寂しく立っている。

右例のように、人間の動作や様子をほかの生き物や物体に当てはめて使います。実際には草はおしやべりしません。しかし、「おしやべりしている」と表現することで、人間が何人も集まっておしやべりしているときのように、ざわざわ音をたてたり、ゆらゆら揺れたりしている様子を読み手に想像させます。

ひとつ要注意なのは、フィクションのアニメや漫画に慣れてしまっている私たちにとって、擬人法が身近になりすぎていることです。

「心が離れる」や「刀の声」など、創作物ではよく使われるような言葉も、擬人法という比喩にあたります。「おひさまがわらってる」なども擬人法です。

テストがみんなを待っている！



『春に』では⑦の「新芽が心をつつく」や⑩の「心のダム」は分かりやすいと思いますが、⑫⑬の擬人法に気がつけた人は少ないことでしょう。⑫と⑬の主語は「気もち」になります。気もちは渦をまいたり、あふれたりはしません。「気もちがあふれる」の言いたいことは分かっても、実際に気もちがあふれてしまうことはありません。

現実の生活に擬人法があふれてしまっているせいで、注意して見ないと擬人法は見逃されがちです。実際に問題を解くとき、選択肢に「擬人法」があった場合は要注意ですよ！

おわりに

スペースが余ったのでコラムを書きます。

詩の勉強なんていつたい何のためにするんだよ！俺は詩の作家になんてならないよ！なんて声が聞こえてきます。じゃあ数学家になるために数学やつとるんかい、って話ですね。しかし分からなくもない訴えだと思えます。そこで、私も勉強しながら改めて考えてみました。

詩の勉強も含めての話ですが、国語で「読むこと」を学習する目標は、自分の考えをはっきりともてる力を育成することです。この力は現代社会においてこの数年でさらに大切になってきている力だと思えます。

とかく、近年はインターネットの発達により、様々な人の意見がすぐに耳に入ってくる時代になりました。ニュースひとつとっても、「首相のやりかたは全然だめだ！」とか「〇〇党の□□さんは素晴らしい！」とか、激しい語り口で発信されるメッセージがそこら中に散らばっています。映画や本の感想でも、同じ作品を味わって「最高！」と書く人もいれば「最悪！」と書く人もいます。

それらを鵜呑みにしてしまうのではなく、「この人はこういう意見なのか。ぼくはどう思うだろう」というように自分で考える力を身につけてほしいのです。そしてそのためには、情報を正しく読み取ること、メッセージを発信している相手はどういう思いで語っているか理解すること、その意図、理由、背景などを「読むこと」が大切なのです。

友だちと映画を見た帰りに、ああだこうだ感想を言い合ったりしますよね。前日のテレビ番組について、次の日に話をしたりしますよね。そのときに「なんか知らんが面白かった」ではなく、「〇〇の△△がかっこよかった！」や「□□の気持ち自分もよく分かる！」と言えるようになっていけると、国語の学習を進めた甲斐があるというものです。

日本語は言語の中でも複雑なほうですが、複雑だからこそ細かいところまでこだわって伝えることができます。「詩を学ぶ」のではなく、「詩を元に学ぶ」と考えられると、国語の学習はどんどん広がっていきます。そして国語にのめり込んでしましましょうね。

